

『法華經』における女人成仏・不成仏思想の混在が意味するもの

鈴木 隆泰（山口県立大学 東京大学推薦）

キーワード：『法華經』における正と反、インドにおける『法華經』の実践、エクリチュール

1. 問題の所在

現行『法華經（*Saddharmapuṇḍarīka*）』には、〈別付嘱〉に代表される「純化・排他的姿勢」（正）と、〈総付嘱〉に代表される「融和的姿勢」（反）が「混在」している。同様の「混在」が、女人（女身）成仏思想についても見られる。どちらの姿勢（あるいは両者）が『法華經』にとって本来的であったのだろうか。

2. 『法華經』に見られる、女人（女身）成仏を認める方向（正）の記述

2－1. 「譬喩品：3」（*Aupamyā-parivarta*）

2－2. 「提婆達多品：11」（後半）（*Stūpasamdarśana-parivarta*）

2－3. 「勸持品：12」（*Utsāha-parivarta*）

2－4. 「法師品：10」（*Dharmabhāṇaka-parivarta*）

これら諸品には、女人（女身）成仏を認める方向（正）の記述が確認される。

3. 『法華經』に見られる、女人（女身）成仏を認めない方向（反）の記述

2に対して、

3－1. 「五百弟子受記品：8」（*Pañcabhikṣuśatavyākaraṇa-parivarta*）

3－2. 「藥王菩薩本事品：22」（*Bhaiṣajyarājapūrvayoga-parivarta*）

3－3. 「觀世音菩薩普門品：24」（*Samantamukha-parivarta*）

これら諸品には、女人（女身）成仏を認めない方向（反）の記述が確認される。

4. 女人（女身）成仏を認める姿勢（正）と認めない姿勢（反）の共存（混在）が意味するもの

たとえ『法華經』が段階成立であろうとも、現行の全 27 章構成のまま、今日まで伝承されてきたという事実に注目するとき、なぜ「正」と「反」の教義を統一し「統合的（合）」にしなかったのか疑問が残る。

5. 結び

『法華經』は、それが完全に混じり合っていないかたちで（止揚されないまま）、女人（女身）成仏を認める姿勢（正）と認めない姿勢（反）を混在させている。『法華經』の“担い手・実践者”がこの状況を放置し続けたという事実は、インドにおける『法華經』の実践が事実上「書写を通じた功德の獲得」に限られ、『法華經』はエクリチュールとしてのみ存在していたことの一証左と考えられる。